

西双版纳（シーサンパンナ）は雲南省の最南端にあるタイ族の民族自治州になっていて、その首府が景洪（ジンホン）である。東部はラオスと南部と西部をミャンマーと国境を接しているこの地域は亜熱帯の湿潤気候で雨の多い地域である。茶の故郷として有名で、「普洱（プーアル）茶」の産地として知られている。茶馬古道の出発点にあたるのがこの地域なのだ。

麗江の空港から約一時間で景洪の空港に到着する。夜暗くなってから到着して宿泊ホテルの「景蘭国際酒店」にチェックインした。翌朝からここを拠点にして各地に出かけていったので、景洪の街は殆ど見る機会がなかった。ホテル近くの夜景と車窓から眺めただけになった。



南国の夜

ホテルに到着するとまず前庭に大きな白象の像が照明に浮かび上がっていた。暗い写真なので判らないかもしれないが、この後ろに入り口があり、椰子の木や旅人の木の植え込みがある。まさに南国ムードに溢れている。

西双版纳には中国内では珍しい熱帯雨林の森が保存され、そこに野生の象が生息していて、それが観光の目玉になっているのだ。いかにもそれらしい演出をしている。

チェックインしてすぐに街散歩に出てみる。市内地図を見ると宿泊したホテルは中心に近い場所にあるが、外に出てみると全体的に街は暗い。左の写真はホテルに近い大きな通りだが、街灯が殆どない。開いている店や建物の照明があるだけだ。車は走っているが、人通りは少ない。時間帯が遅いこともあって閉まっている店が多い。南国特有のねっとりとした湿気のある空気の中を足元に気を付けながら一回りする。

遅い時間だが開いている店もあった。いずれも地元の人たちが利用する様な雑貨店や食堂や屋台である。

食堂に入っているのは若者が多い。自転車やバイクに乗ってきて食事をしていた。



屋台や通路上で飲み物を飲んでいる人もいる。



今までの大理から麗江までの様子と建物も人々も雰囲気もまったく違ってきている。ここは熱帯の町だというのが最初の夜の印象だった。南国の夜は家に居るより屋外の方が居心地がよい。東南アジアでよく見かける光景だが、ここは思ったより、暗く静かであった。

西双版纳と景洪市



朝出発前にホテルの周囲を散策した。左は宿泊したホテルの横にある歩道で、この左に大きな車道がある。建物の造りも樹木も熱帯地方の東南アジアで見かけるものだ。

ここでホテルのあった景德路の朝の写真を紹介しながら、日本ではあまり馴染みのない西双版纳と景洪についての概要を述べることにしたい。

<西双版纳>

西双版纳には古くからタイ族が住み着いていて、現在、雲南省の中でタイ族自治州に設定されている。

約 100 万人が住んでいるが少数民族が多い。中心となるのがタイ族だが、他にもジノ一族、プラン族、ハニ族、ラフ族、ヤオ族、イ族、ワ族、白族、漢族が住み着いている。人口の約 75%が漢族以外の少数民族でタイ族が人口の約 35%を占めていると言われている。

西双版纳の由来についてこんな話がある。12の千の田を意味するタイ語の「シップソンパンナー」を北京語で音写したものであるとされている。稲作の起源の一つとされているこの地には世界的に有名な大規模な棚田が多い。千枚田というところだろう。今回も計画段階では規模の大きさと山の上まで築かれた棚田の美しさで名高い「元陽」を訪れるつもりでいたが、日数が掛かり過ぎたので割愛したのだった。

この地域には象が生育し、上座部仏教が信仰され、パラミツ、ランプータン、パイア、マンゴー、アボカド、パイナップルが実る等東南アジアの一角といえる。また、赤米、なれずし、納豆等漢族にない日本と共通する食品が有り、稲作中心の文化が日本の原郷と称している研究者もいるくらいである。

中央部分を南に流れる地元で瀾滄江（百万の象を意味するランサーンに由来する）と呼ばれているメコン川を通じて、ラオス、タイ、カンボジアと水運でつながっている。



ホテル近くの道路の朝風景だが木が生い茂り緑にあふれている。椰子やガジュマルの並木道で、これはまさに南国の景色である。

<景洪市>

タイ民族自治州の首府である景洪はタイ族の中心地になっている。人口 37 万人の町だからそんなに大きくない地方都市だ。タイ族が 25 万人。少数民族が 67%を占める。面積の 95%が山林で農地は 5%しかない。

特産品はゴム、プーアル茶、コーヒー等で市内を瀾滄江が流れ、東南アジア貿易の拠点になっている。野象の谷、熱帯植物園、パン

ナ猿園、民族風情園（少数民族の歌舞場）の観光資源に恵まれていて、近年観光客も多いようだ。

時間があれば瀾滄江岸まで行って貿易で賑う港や船を見てみたかったが残念であった。

右の写真は景洪市内にあった道路の標識であるがデザインがいかにもタイ風であり、タイ文字も併記されている。ここがタイ族の場所であることを思わせるものだ。

<タイ族>

中国内のタイ族は 110 万人強で、はじめは中国南部の土着民で百越と呼ばれていた。中国で稲作を最初に始めた民族の一つとされている。それが外圧により西へと移動を繰り返して、現在は雲南省南部の西双版纳や徳宏といった所の金沙江（長江上流）、瀾滄江（メコン河上流）、怒江（サルウィン川上流）、紅河流域で生活している。

このタイ族は「傣族（雲南省に住むタイ族系ルー族）」として、東南アジアのタイ国に住む「泰族」と区別されている。「傣」というのは自由を意味するらしい。奴隷としてではなく自由人として生きようとした誇り高い民族なのだ。東洋史ではさらに人口増加の圧力から南下していったタイ族が雲南、貴州を経てシャムに入り、インドシナ半島の中央部でムアン（集落）を形成し、やがてタイ王国を作りあげていったと記載されている。

